

(1) リアルの合体

I

雲が速く動いているらしく、カーテンが閉められたように窓から差しこんでくる光がまた乏しくなった。暗い色に変じたスチール・デスクに載っている大学ノートを目の中に入れながら、山岡秀介はふたたび心を揺らした。

もし、ほんとうだったら、どうなる？

明暗を忙しく転じている机の上と同様に、彼の心も先ほどから「妄想」と「事実」の間を行き来していた。今しがた「妄想」だと決めつけ、しっかりと蓋をしたはずなのに、もし「事実」だったらどうするんだ、という思いが頭の先を覗かせている。

「万が一、そうだったら、とんでもない話だ……」

右の手が伸びて、大学ノートを開いた。走り書きで自分でも判読が難しいボールペンの文字を、目が追っていく。数時間前、池袋署の接見室で被疑者・津村真之の口から語られた言葉を思い起こしながら、弁護士は「事実」をもう一度、頭の中で再現してみる。

気がつくくと、奴がいた。

肩が吊り上がるほどに大きく見開かれながらも、感情をかけらも宿していない両方の眼。デスマスクみたいに表情を放棄した顔。まるでゾンビだ。総毛立って開いた毛穴の一つひとつに恐怖が入りこんできて、逃げ出そうとしたが、足が動かない。

だが、相手はサラリーマンのおやじだ。負けるわけがない。ぶつ殺してやる。構えていたサバイバル・ナイフを握り直すと、白い刃先が視野の端で光った。

肩が小さく動いて、奴が動きだした。ゆっくりと近づいてくる。沼地にでもいるかのように一歩一歩足を引き上げ、身体を揺すりながら歩いてくる。ワイシャツの胸前で赤いネクタイが、象の鼻みたいに揺れている。

「わあーっ」

恐怖に耐えきれず突進し、ナイフを前に突き立てた。瞬間、半袖シャツから剣ぎ出しになった奴の腕がよろりと長くなって伸び、ナイフを持った手首を握んだ。垂れ下がっていたネクタイが生き物のように伸びてきて、こっちの首に巻きついた。苦しい。息が詰まる。殺される――。

もがいていると、世界の壁がばかりと割れて、意識が浮かび上がった。夢？ いや、夢じゃないかも。いいや、やはり夢だ。完全には覚めきつていない頭が、二つの間でウロウロした後、夢だと結論を下した。

ベッドから身体を起こし、首のまわりを確かめた。ネクタイなんか巻きついてやしない。真冬だというのに、汗で濡れそぼった肌に指が滑った。

指先が現実を確かめて、少しほっとした。が、安堵の思いは、すぐに不安へと姿を変える。何度、同じ夢を見ればすむんだ。

あのサラリーマンのおやじ――生気を微塵も感じさせない顔が臉の裏に浮かんで、身震いした。恐怖の波がふたたび押し寄せて、また呼吸が苦しくなった。

〈S……〉

ベッドを転がり下りて、机の前まで行った。引き出しを開けて、中をかきまわした。買い置きはなかったはずだ。が、使い忘れた小袋が、どこかに残っているかもしれない。引き出しを次々に開けて、中をかきまわした。隠れていた押しピンが指の腹に刺さって、血が滲んだが、かまわず探した。終いには、中に入っていたものを、すべて絨毯にぶちまけた。

どこにもなかった。肩で大きく息を継いだ。

買いにいこう。腰を浮かせた時、カーテンの隙間から差しこんでいる白い光に気づいた。売人がゴキブリみたいに増えているとはいえ、Sは二十四時間営業のコンビニで売っているわけじゃない。

すぐに手に入らないとわかったとたん、不安がさらに強くなった。喉の奥が狭くなり、ほんとうに息が詰まりそうだった。がたがた震えがきたのは、部屋の寒さのせいばかりでなかったはずだ。Sが欲しい。スピードが欲しい。あれさえ頭の中に染みこめば……。

這っていつて、ストーブに火を点けた。パジャマのまま火の前でうずくまり、頭の中に湧き出してくる「あの晩の記憶」を追い払おうと抗いながら、震える膝を強く抱えこんだ――。

それは特別なことではなかった。マクドナルドでハンバーガーを買うのと同じような行為で、違っているとすれば、ビッグマックの何百分の一かの重さしかない小袋に、五千円札一枚が飛んでいくということだけのはずだった。

あの晩は、居酒屋でのバイトが終わったあと、池袋駅にほど近い、いつもの場所へと足を運んだ。九月の末、台風が過ぎた翌日だったせいか、東京にしては珍しく空気の澄んだ夜で、独立峰

のように黒くそびえ立っているサンシャイン60のそばに、クレーターの一つひとつまで見えそうな満月が浮かんでいた。

ラブホテルの明るいき板だけが目立っている裏通りを、スタジャンに両手を突っこんで、ぶらぶら歩いた。公園の角を曲がったところで、道路を斜めに渡って、背の高い人影が近づいてきた。そいつが何者であるかは、直感でわかるようになっていた。

男はそばまで来て、足を止めた。

「Sいる？」

日本人ではないと、すぐにわかる顔だちと喋り方だった。

「いくら」

「全部ついて五千元」

ジーンズのポケットから用意してあった紙幣を抜いて、男に渡した。代わりに、ビニールの小さな袋が掌の中に押しこまれた。いつもなら、これで取引は終わつたはずだ。あとは、何事もなかったかのように前へと歩いていくだけだ。が、その晩は違った。

「おやじ殺しゲームやる？」

耳元で、確かにそう囁かれたのだ。仲間うちで噂になっていた名前だった。

「Sきめてやると、死ぬほど気持ちいいよ」

「い、いいけど、いくら」
言葉が転がり出していた。

「無料ね、サービス」街灯の光を受けて、口髭を生やした男の顔が笑つたように見えた。「真つ直ぐいくと、黒いワゴン車が駐まつてる。うしろの窓、三回叩く」

それだけ言うと、売人は去つていった。

「おやじ殺しゲーム——」

口の中で呟いたあとは、何かに引つ張られるように前へと歩を進めた。歩きながら、もう興奮していた。残虐度が高いとかいう理由で街のゲームセンターには絶対に置けないハードでリアルな3Dバトルゲームで、とくにSをきめてやると、実際に人を殺したような快感を味わえる。どんなイイ女とやるよりも興奮できて、恐怖に怯えて逃げまどう相手にとどめを刺した瞬間、射撃つてしまった奴もいるという。そのゲームがあるというのだ。

身体をからめた一組のカップルとすれ違っただけで、あとは歩く者もない真夜中の道を五十メートルほど行くと、黒いワンボックス・ワゴン車が駐まつていた。後部の窓にフィルムが貼つてあって、内部は見えない。一瞬躊躇したが、やれるんだぜ、という思いの前には無力だった。街灯の光を宿している窓を、指の角で三度叩いた。

ズツと音を立てて、スライド式のドアが開いた。

「乗ってください」

夜だというのにサングラスをかけた男が、車の中から言った。開いたドアから車に乗りこんだ。

ワンボックス・ワゴン車の後部は、通常の座席が取り外され、肘かけつきの大きな椅子が一つついているだけだった。

「座ってください」

男はドアを閉めた。窓には黒いフィルムが貼られていたし、前部の座席とはカーテンで仕切られていたから、車ではなく、ひどく小さな部屋にでも入つたような気分になった。

自分自身は折り畳み式の椅子に腰をかけると、男は言った。

「些少ですが、あとでモニター料もお支払いたします。あるゲーム機メーカーがユーザーの興奮度調査のため、行っていることですのさ」

理由を言われて、わずかに残っていた疑いのかげからも消えて失せた。

薄暗い車内灯の下ではよく見定められないが、男は三十代といった歳の頃だ。マーケティング会社の人間なのだろうか。話し方も丁寧だったし、大きめのサンングラスを取れば、どこにでもいるサラリーマンの顔が出てきそうだった。

「準備がありますので、二、三分待って下さい。そちらも準備があるんなら、どうぞ」
男は仕切り用に使われているカーテンを開けて、前部座席のほうに移っていった。

こっちも準備をしたほうがいい。売人から渡されたビニール袋の中には、Sの小袋の他に、折り畳んだアルミ箔と使い捨てライターが入っている。

アルミ箔を広げて太股の上に置き、小袋から白い半透明の結晶を何粒か落とす。左手でアルミ箔を持って、下からライターの火で炙った。鼻を近づけて、思いつきり息を吸いこんだ。幾度も繰り返した。

半透明の結晶がすべて気化してしまうと、背もたれに上半身を預けて、目を閉じた。ゆっくり息をしながら、待った。

来た。来た。何かが身体の真ん中に入りこんできた。パワーだ。パワーが注入された。頭のとっぺんから尻の先まで太い芯が一気に通って、それがじわじわと全身に染みだしていく。

さらに待った。細胞の一つひとつにまでパワーが入りこむ。まぶたを開けた。世界が変わっていた。

薄暗かったが、何でも見える。前の座席とを仕切っているのは、カーテンでもアコーディオン・カーテンだ。その上を嫌々らしいの大きさの羽虫が一匹這っている。車の横を人が通り過ぎていく。「そうなるよ、まじヤバイし」女の声が耳のそばで喋られたようにはつきりと聞こえ、遠ざかってゆく。シートに掌を押しつけると、皮膚のすべてがびったりとくっついて気がいい。感覚という感覚が立ち上がっている。

腕を回してみた。筋肉が倍ほどもついている感じで、腕は軽々と回った。先ほどの羽虫が動きを止め、こっちを見ていた。黒く光った二つの目が睨んでいる。触覚がクイクイと揺れた。何かを言われたような気がした。こいつ、俺に喧嘩を売るつもりか。

へひねり潰してやるるか。えっ

思った次の瞬間、虫はカーテンの上へと逃げていく。そうだ、そう、逃げたほうがいい。俺に敵う奴はいないんだ。可笑しくなって、声を立てて笑った。

「お待ちどおさま」
カーテンが開いて、男が戻ってきた。フルフェイスのヘルメットのようなものを手にしている。

「回しますのさ」
背もたれに手をかけた。ペダルを踏んだようだ。座っていた椅子が百八十度回転して、うしろを向く形になった。

すぐ前には、街のゲーセンに置かれているような、大型画面付きのゲーム機があった。
「データ・グローブです。はめてください」

機械の上にあつた手袋を渡された。バイクのグローブみたいだったが、肘を覆うほどの長さか

あり、コードで機械とつながっていた。

「武器です」

ナイフを渡された。刃の部分がゴムでできているオモチャだった。

「もう少し本物っぽいもんを使ったほうが、気分出るんじゃないの」

「これは握っているという感触を得てもらうだけのもので、画面上にはスーパー・リアルなサブイバル・ナイフが現れますから」

男は淀みのない口調で、ゲームのやり方を説明していく。椅子の各部分にセンサーがセットされていて、重心を前かけると画面が前進し、背もたれに上半身を預けると後退。肘かけに身体を押しつけることにより、左右の動きが選択でき、データ・グローブで握ったナイフを振るうことで、敵への攻撃が可能になってくる。ゲーセンに置かれている体感ゲームと似たようなものだ。

最後に、フルフェイスのヘルメット。3Dの立体メガネやスピーカーが仕込んであるという。「相手の息が止まったところで、ゲーム・オーバーになります。ただし、むこうの反撃も厳しいものがあるので、油断していると、逆に殺られるかもしれません」

自分が殺られるなんて、毛の先ほども思っていなかった。身体のだ真ん中に送りこまれたSのせいで、脳や五感はレッドゾーンまで跳ね上がっていて、ターミネーターだって呼んでいいだ。おい、早くおやじ殺しやらせろよ。説明をする男の声が回転を落としたテープレコーダーみたいに聞こえる。

「接触性をよくするため、ベルトを締めてください」

椅子についていた二点式のシートベルトを締めた。肘までの長さがあるデータ・グローブに手

を差し入れる。フルフェイスのヘルメットはバイク用のものより視野が狭く、気密性が高くて、内側が皮膚に密着した。通気孔が開いているらしく、息が苦しくなることはない。最後にオモチャのナイフをグローブの右手で握った。

「最初の三十秒はゲームとは無関係のシーンが出てきますので、身体を動かす練習をしてください。そのあと、ゲームが始まります」

耳のそばでスピーカーを通した男の声が聞こえてきたので、前にある大きな画面を見つめた。映像が現れた。コンピュータ・グラフィックスで描かれた昼間の街が出てきた。耳に聞こえてくるサウンドは、どこかのテレビゲームからパクったみたいな間の抜けた曲だった。

身体を前に倒してみる。画像が前進した。左側の肘かけにもたれかかると、左の花壇に突っこみそうになった。いつだったかゲーセンでやったスキーのダウンヒル・ゲームに似ていた。

「武器を使ってみてください」

頭のすぐ上に街路樹の枝がある。ナイフを振るってみると、枝がすっぱりと切れて飛んだ。この切れ味なら、相手の頸動脈を狙っても面白い。さあ、早くやらせろ。

「道を真っ直ぐに進んでください。前方に敵が待ち構えています。私からの連絡は、これが最後です。グッド・ラック」

男の声が消えるのと同時に、サウンドが不協和音の連続に変わった。画面に赤と青の色が激しく明滅する。視野の中で実像と残像が重なり合って、目から頭の芯につながる回路がおかしくなりそうだった。

不協和音が止むと、夜の風景になっていた。リアルなタッチで描かれた荒れた夜の街だ。通りにはゴミや空き瓶が転がり、建物の窓は破れている。半壊したビルもあって、奥のほうで火が

ろろ燃えている。風に吹かれて大きなゴミが転がってきて、思わず片足を上げる動作をしてしまった。

ヘルメットからは、横長の四角に区切られた視野しか得られていない。その視野がモニター画面と一致しているから、画面にあるものが見えるすべてで、立体メガネを通すと、実際に夜の街にいたのと同じだった。

歩きだした。敵は、どこにいる。

少し行ったところで、カラカラという乾いた音が聞こえて、足が止まった。道の右端に人の姿。あれか。身構えて、近づいていった。違う。道の端に右の地蔵が立っていたのだ。

へなんで、こんなところに……

地蔵の足元には赤い色の風車が刺さっていて、カラカラと音を立てて回っている。鮮やかな赤が目の中に染みこんでくる。いつの間にか、サウンドは子守歌に変わっていた。場違いな物に、場違いな曲。違和感が心を波立たせる。オルゴールによって奏でられている子守歌は、音が飛んだり、音程があちこちで狂っている。気持が悪いから、止せよ、おい。

狂っているのは、曲ばかりではなかった。画面も変だ。道は画面の中央を通っているのではなく、左に少し偏っている。街路灯は遠近法を無視して、遠くに行くにしたがい、わずかずつ大きくなっていく。

Sによって剣き出しになった聴覚や視覚が、違和感を何倍にも増幅させ、それが不安へと変わっていく。

早く出てこいよ……

気がつくと、奴が正面にいた。おやじだ。てつぷりと太った中年男で、突き出た腹の上でセン

スの悪い赤いネクタイが揺れていた。

ゆっくりと近づいてきたおやじの顔に視線を飛ばした時、強い恐怖を覚えた。歯を剣き出しにし、目を大きく見開いているというのに、生気が微塵も感じられない。

危険だ。本능が警報を発する。一方で、Sのパワーが身体を煮えたぎらせる。胸の鼓動が速くなり、血液がどくどくと流れる。頭と心臓が爆発しそうだ。

耳にはヘビメタ調のサウンドが入りこんでいる。ベースが「殺せ、殺せ」と、ごつごつしたりリズムを刻む。奴が近づいてくる。出てもいない生唾をむりやり飲みこんで、ナイフを握り直した。

それからのことは、思い出すだけでも吐き気がしそうだった。奴の動きは、こちらより何倍も速かった。まるで大人と子供の闘いで、ナイフを振るっても簡単にかわされ、あげくはネクタイが伸びてきて、こっちの首に巻きついた。何がどうなっているのか、息ができなくなった。殺される、死ぬ。力を振り絞って息を吸いこもうとすると、薬品の臭いがして、直後、絶望的な恐怖の中で意識が遠のいていった。

目が覚めてみると、公園のベンチで寝ていた。起き上がって、道に出てみたが、あのワンボックス・ワゴン車はどこにもなかった。あれは現実だったのか、悪夢だったのか。

思い出したくもない体験だったが、その後も思い出すどころか、幾度となくあの恐怖を再体験させられることになった。奴が夢に出てきた。細かなところはその度ごとに異なったが、ゾンビのような顔つきと、伸びてきたネクタイが首に巻きつき、息が詰まりそうになって目が覚める結末は、いつも同じだった。

へあのおやじが俺の中に住みついて……

ストロブの前でうずくまり、膝を強く抱いたが、震えはおさまらなかつた。吐き気もして、口を掌で覆った。今朝の夢では、いつになく強い恐怖を覚えた。どうしていいのか、わからない。Sが欲しい。Sが入れば、楽になれる。

屑籠——そこに思いが行った。一週間以上、屑籠のごみは捨ててなかつたはずだ。思うや、パネ仕掛けの人形みたいにストロブの前から立ち上がり、ベッドのそばまで行っていた。

金属製の屑籠を逆さまにして、中身を床におちまけた。ティッシュペーパー、蜜柑の皮、スナック菓子の外箱、それらに混じって、封が破られたポリエチレンの小袋があつた。手にとって、カーテンの間から射し込む光に透かしてみた。一粒、二粒、半透明の小さな結晶が袋の底に残っている。まだあつたはずだ。ごみをかき回す。もう一つ袋が見つかった。

袋をつまんで、いそいそと台所に向かった。流し台からアルミホイルを取り出す。小袋を割いて、底に残っていた結晶をアルミホイルに載せる。二つ合わせても、いつもの五分の一にも満たないSだつた。ライターでアルミホイルの底を炙つた。少しの量も逃してはならない。炎の熱を感ずるほどのところまで、鼻を近づけた。吸い込んだ。貪るように幾度も吸い込んだ。

アルミホイルの上の結晶は呆気なく消滅した。頭がすっきりしたような気もしたが、体の中に何かが入り込まれたような例の感じは来なかつた。量が足りなかつたのか。

その場に座りこんでいると、二階から階段を下りてくる靴音が聞こえた。勤め人たちが会社に行く時間になつている。ドアが閉まる音がした。引きずるような足音が近づいてくる。いちばん奥の部屋に住んでいるデブだ。ドアの前を通り過ぎる時、言葉が聞こえた。

「まだ生きていやがるのか」
そう聞こえた。

そうか——初めて疑問がすつきり解けた。夢の中に出てくるおやじは、あのデブが姿を変えたものなんだ。いつだったか、通路ですれ違つた時、あいつ、おかしな目つきで、俺を見ていた。酔っぱらつて帰ってきた時、ドアを蹴飛ばされたこともあつた。

ぶよぶよした顎の下から垂れているネクタイ。そうだ、あいつはよく赤っぽいネクタイをしている。このまま放つておけば、いつかは、あの男のネクタイが首に巻きついてくる。息が詰まるような気がして、首のあたりを掻きむしつた。

「殺られる前に殺るんだ」

頭の中で声がした。そうだ、先に殺つてしまったほうがいい、今すぐにだ。

操り人形みたいに身体が持ち上がり、足は台所に向かつていた。「それを使うんだ」内なる声の命ずるまま、文化包丁を手にとって、柄を強く握りこんだ。素足をスニーカーに突っこんだ。

ドアを開けて、部屋を出た。

表に出た時、デブは明治通りに向かう道を歩いていた。朝日を受けて、紺色の背広の肩がてらと光っていた。早足で後を追つた。

コンピニの前まで来たところで、先に行くデブは、店の外に出ていた若い店員に声をかけた。
「うしろの死にぞこないに気をつけろ」

そう聞こえた。店員が凍りついた顔で、こっちを見る。こいつも、デブの仲間なのか。

背広の背中が、すぐ前に迫っている。振り向かせると、あのネクタイが伸びてくる。振り向かせる前に——すべての思いを右腕にこめて、包丁を背中の中身に突き立てた。骨に当たったのか、刃は浅く入っただけで、

「あうっ」

相手が振り返った拍子に背中から外れた。目を剥いて口を大きく開いた顔が、すぐ前にあつた。ネクタイが伸びてこないうちに——喉元めがけて突き出した包丁が、首筋をかすめた。

「人殺し！」

デブは逃げ出した。後を追った。すぐ先が新聞販売店で、奴は店の前にとめてある自転車に足を引っかけた。自転車といつしよに、肥った身体が路上に転がった。押さえつけて、刃を首筋に突き立てた。

「ぎゃあ」

壊れたブレーキみたいな声が出て、今度はほとんど手応えもなく、刃は首筋に吸いこまれた。しとめたか。思った瞬間、凄いだげで撥ね飛ばされた。

包丁を首に突き立てたまま、店に逃げこんだ。ガラス戸が割れた。奴は躓いて、入口の三和土に倒れた。肥った身体に馬乗りになった。下の男は激しく暴れて、崩れてきた新聞の塊が肩や頭に当たった。かまわず刺さっていた包丁を引き抜いて、振り下ろす。引き抜いては、振り下ろす。こいつはゾンビだ。とどめを刺しておかなければ、生き返る。腕を上下させる度、顔や手に生温かいものが飛んできて、へばりつく。深くささった刃を引き抜こうとすると、ぬるぬるした柄に掌が滑って、抜くことができない。見えるものすべてが、真っ赤になっていた。

「ゾンビみたいなのを頭に送りこまれたんです。だから、あの人がゾンビだと思ひこんで、こつちが殺らなければ、いつか殺られるだろうって——」

接見室で、被疑者の津村貴之は殺人の行為を認めたあと、堰を切ったように「おやじ殺しゲーム」の話を話し出した。透明な仕切り板のむこうにいる若者の表情は真剣そのもので、嘘をつ

いているふうではなかった。

しかし——要点をメモしながら、山岡は思った。相手は覚醒剤の常用者だ。すべては、クスリによる妄想かもしれない。

「そういつたことは、取調べの人間にも話したんですか」

長い話に区切りがついたところで、山岡は訊いた。肩まで伸ばした髪を揺らして、若者は大きくうなずいた。

「言いましたよ。言ったけど、「シャブやって、おかしな夢でも見たんだろ」って、相手にされなくて」

同じことを捜査員も考えたのか。困惑しながら、次の問いかけをした。

「さっき、きみは仲間うちで「おやじ殺しゲーム」のことが噂になっていたと、言いましたね。だったら、そのゲーム自体は現実存在しているんじゃないやありませんか」

「だけど、噂だけで、実際にやった者はいないんです。むろん、ぼく自身も、やったのは、その時が初めてでした」

そんなやりとりをしているうち、留置係の警察官が顔を出して、許可された接見時間が終わつたことを告げた。

困惑は、九段の法律事務所に戻り着いてからも続いていた。

机の上には、事件を報ずる新聞記事のコピーも載っている。どの記事も「殺人ゲーム」には触れられていない。

事件が起こったのは、二月十二日の午前七時半頃だった。東京都豊島区南池袋一丁目のアパート「コーポ夏見」に住む大学生の津村貴之（20歳）が、同じアパートに住む会社員・住友幸一

(34歳)を路上で襲撃。被害者が逃げこんだ新聞販売店の店内で、文化包丁を用いて滅多刺しにし、殺害した。池袋署の調べによると、津村は被害者が自分の悪口を言っているのを耳にして、犯行に及んだ。が、意味不明の言葉も口にしてしているため、精神障害か薬物中毒の可能性もあるとして、同署では調べを進めている。

その日の夕刊各紙を要約すると、おおよそ以上のようなになった。続報は翌日の朝刊に載っていた。加害者の尿から、微量ながら覚醒剤の成分が検出された。津村はここ半年ほどの間、S^g、スピド^gと呼ばれ、若者たちの間で蔓延している覚醒剤を使用していた。そのため、薬物による幻聴や妄想が犯行の引き金になった可能性が高い、と記されていた。

新聞報道は翌日の朝刊までで、それ以降の続報はない。殺人事件とはいえ、死んだのは一人だけで、犯人はすでに逮捕されているのだ。ニュース・バリューはなくなつたものと、考えられているのだろう。今の時代、人が人を殺すことは珍しくもない。どの新聞の社会面にも、殺人や傷害致死事件の記事がバッチワークのようにちりばめられている。

いずれにせよ、殺人ゲームのことは、どこにも載っていない。取調べにあつた刑事がシャブ中の妄想だと決めつけているのなら、記者発表されることもなかつたはずだ。

しかし——弁護士は思った。もし、ほんとうにそんなゲームをやらされていたとするなら、裁判の進め方が大きく違ってくる。

この事件は、事実関係では争う点がない。被害者を殺害したのは紛れもなくあの若者だし、殺意もはっきりしているから、殺人罪が適用される。したがって、公判で争われるのは、責任能力があつたか否かの点である。

心神喪失状態、つまり、犯行時、自分が何をやっているのかまったく判断できない精神状態だつたと判定されたならば、被告人は罪に問われない。またそれよりも軽度な心神耗弱状態だとされるなら、罪は割り引かれて軽いものになる。

昨夜、被疑者の父親から息子の弁護を依頼されたあと、過去に起こつた覚醒剤がらみの殺人事件の判例をいくつか調べてみた。

一例として、数年前、新幹線の車内で覚醒剤の常用者に出張帰りのサラリーマンが刺殺されたという事件がある。両者に面識はなく、覚醒剤の作用によつて妄想を抱いた加害者が突然、犯行に及んだ。公判で弁護側は、被告人は薬物中毒による心神喪失状態にあり、無罪だと主張したが、判決では責任能力ありと判定され、懲役十五年の刑が下されている。

それ自身が反社会的行為である覚醒剤の使用が原因となつた凶悪犯罪では、裁判官の見る目も厳しいものになる。今回の事件もふつうに審理が進めば、間違ひなく長期にわたる懲役刑の判決が下る。だが、あの青年が言っていたとおり、被害妄想を駆り立てるようなゲームをやらされていたとするなら——。

「山岡先生、コーヒーはいりました」

女の声に我に返つた。麻倉千鶴^{あさくらちず}だった。

山岡専用のモーニングカップを机に置いたあと、新聞記事のコピーに目を向けて、女性事務員は言った。

「きのう依頼された事件ですか」

「そう、覚醒剤による妄想から罪もない隣人を刺し殺したという、なんとも救いようのない事件」

この先は本で読んでね